目次

はじめに……iii
流布本影印編……1
新出原稿影印編……107
流布本翻刻編……185
新出原稿翻刻編……261
二つの「未来の天才」……311
「未来の天才」流布本文の自筆原稿・初出本文について……327
「未来の天才」校異表……341
単行本『未来の天才』の訂正書き込み……355
単行本『未来の天才』の訂正書き込み・解説……387
おわりに……391

はじめに

小山内薫が明治四十（一九〇七）年に創刊した（第一次）『新思潮』は、東京帝国大学文科生による同人雑誌として受け継がれ、谷崎潤一郎、和辻哲郎らの第二次『新思潮』を経て、第一高等学校在学中の山宮允（まこと）を中心にして、山本有三、久米正雄、柳川隆之介（芥川龍之介）、豊島与志雄、井出説太郎（土屋文明）らによる第三次『新思潮』の創刊号が大正三（一九一四）年二月十二日に発行される。豊島与志雄はこの『新思潮』創刊号に「湖水と彼等」という作品を発表し、同年三月一日に発行された第二号（三月号）には「蠱惑」を、同年五月一日に発行された第四号（五月号）にはアナトール・フランスの「*Le Jardin d'Epicure*」の部分訳を「「エピキユールの園」より」として発表し、同年六月一日に発行された第五号（六月号）には「逐はれし人」を発表している。また、大正三年五月には、『帝国文学』に「彼と彼の叔父」（新潮社から出版された新進作家叢書第三集『生あらば』に収められるにあたって、もともとの題名である「恩人」が使われている）を発表している。この作品については、中村星湖（一八八四～一九七四）が大正三年五月十日に発刊された『時事新報』の「五月の小説」において激賞したことが知られている。ちなみにいえば、新進作家叢書の第一集は武者小路実篤『新しき家』（大正六：一九一七年五月）、第二集は里見弴『恐ろしき結婚』（大正六：一九一七年五月）で、第四集が志賀直哉の『大津順吉』（大正六：一九一七年六月）である。芥川龍之介の『煙草と悪魔』は第八集（大正六：一九一七年十一月）、久米正雄の『手品師』は第十集（大正七：一九一八年一月）で、『新思潮』の同人であった芥川龍之介、久米正雄に先だって豊島与志雄の作品を収めた新進作家叢書が出版されている。

芥川龍之介は『新潮』第二十八巻第五号（大正七：一九一八年五月一日）に「人の印象（十六）―豊島與志雄氏の印

象」「人の好い公卿惡」という題名で発表した文章中において、「豐島は作品から受ける感じとよく似た男である。誰かゞそれを洒落れて、「豐島は何時でも秋の中にゐる」と形容した。さう云ふ性格の一面は世間でもよく知つてゐるだらう。が、豐島の人間にある愛す可き惡黨味は、その藝術からは得られない。親しくしてゐると、ちよいと人の好い公卿惡と云ふやうな所がある。さうしてそれが豐島の人間に、或る「動き」をつけてゐる。さう云ふ所を知つて見ると、豐島が比較的多方面な生活上の趣味を持つてゐるのも不思議はない。だから何も豐島は「何時でも秋の中にゐる」譯ではない。反つて實は秋が豐島の中にゐるのである」（引用は一九七七年、岩波書店『芥川龍之介全集』第二巻一八〇～一八一頁）と述べている。また、芥川龍之介は「大正八年度の文藝界」において、（江口）「渙氏に比べると、山間の湖の如く静なのは、豐島與志雄氏の作品である。氏の秋よりも爽かな情味は、殆ど他に比類のないものであるにも關らず、本年度に於ける與志雄氏が、頗る創作に怠る所があつたのは、不本意至極と評せざるを得ない」（引用は、『芥川龍之介全集』第三巻二九〇頁）と述べており、「創作に怠る所があつた」と述べつつも、豐島与志雄の作品について「山間の湖の如く静」「秋よりも爽かな情味」と評価している。

昭和二十六（一九五一）年三月に河出書房から出版されている『文学以前』に「太宰治との一日」という、太宰治との交流を描写した文章が収められている。太宰治は、それに三年先立つ昭和二十三（一九四八）年六月に出版された、豐島与志雄の『高尾ざんげ』（新潮文庫）の「解説」において、「教養人の悲しさを、私に感じさせる人は、日本では、（私が逢つた人のうちでは）豐島先生以外のお方は無かつた。豐島先生は、いつも會場の薄暗い隅にゐて、さうして微笑してゐらつしやる。しかし、先生にとつて、善人と言はれるほど大いなる苦痛は無いのではないかと思はれる。そこで、深夜の醉歩がはじまる」（二五八頁）、「音樂家で言へば、ショパンでもあらうか。日本の浪花節みたいな、また、講釋師みたいな、勇壯活潑な作家たちには、まるで理解ができないのではあるまいか。おそらく、豐島先生は、いちども、そんな勇壯活潑な、喧嘩みたいなことを、なさつたことはないのではあるまいか。いつも、負けてばかり、さうして、苦笑してばかりゐらつしやるのではあるまいか。まるで教養人の弱みであり、缺點でもあるやうに思はれる。（略）教養人といふものは、どうしてこんなに頼りないものなのだらう。ヴイタリテイといふものがまつたく、全然ないのだもの。ああ、先生も、私と同様に、だらしがない。さうして、日本で、いちばんの教養人だつてさ」（二五九～二六〇頁）と述べて、豐島与志雄への傾倒を示している。

昭和三十（一九五五）年に角川書店から刊行された昭和文学全集第五十三巻『昭和短篇集』の「解説」において、平野謙は「豐島與志雄もまた語りがたい作家のひとりである。たびたび引用して恐縮だが、川端康成は豐島與志雄について、おなじ新思潮派でも芥川・菊池のやうに流行作家になつたこともないし、大家にもならぬかのやうだ、明確な代表作といふものさへないかもしれない、みんな豐島自身が避けてきたと思へるほどだ、と語つてゐる。中島健藏もまた、日本文壇の長老といふものがあるとすれば、豐島以外の作家は豐島が存在するがゆゑに長老の仲間にはいれない、あれほどながく書いてゐて結論が出てない、一作ごとに謎をかける、と書いてゐる。知的、神祕的、心理主義的、ニヒリスティック、蒼白きといふやうな形容詞が豐島の文學につけくはへられる定跡みたいなものだが、そのこと自體豐島の曖昧性を證明してゐるかのやうだ」「大ざつぱな公約數として確言できることは、現代日本文學の基調をなす自然主義的手法とか私小説的發想とかいふものと、終始豐島與志雄が無縁であつた、といふ事實くらゐである」（三七七頁）と述べており、「語りがたい作家」とみなされていることがわかる。

昭和四十二（一九六七）年には未来社から、『豐島与志雄著作集』（全六巻）の刊行が始まる。その第一巻の「解説」において、中村真一郎は「豐島与志雄は近代日本の最も重要な作家である、と私は思う」と述べ、豐島与志雄の「仕事が他の大正作家たちには滅多に見られない、新しい現代的な可能性を極めて多く含んでいる」と述べ、さらには

「殆ど誰からもその彼（引用者補：豊島与志雄のこと）の仕事の新しい本質が未だ理解されていない」と述べている。ここでは「未だ理解されていない」という表現が使われている。

『豊島与志雄著作集』が刊行された後、昭和四十七（一九七二）年九月に発行された『季刊文学・語学』第六十五号は「日本文学研究の展望　文学史的観点における」という特集を組んでいるが、その中の紅野敏郎「「マイナー作家」の位置づけ」において、郡虎彦、佐佐木茂索、松永延造、田畑修一郎とともに豊島与志雄が採りあげられている。紅野敏郎は豊島与志雄について次のように述べている。

> 豊島与志雄という作家は、生前においても、死後においても、一般受けのする、小説作りのはなはだ巧みな作家、売れっ子的な作家には、一回もならなかった。はなやかな、脚光を受けることが非常に少なかった作家と言ってよいと思います。デビューは、芥川達と、ほぼ同じでありながら、しかもある一時期には、芥川以上に評価される要素を大いに持っていたにもかかわらず、豊島は、やはり文学史の中の片隅の存在というかたちでしか見られていなかった。その是正が、いわば「著作集」という形で、打ち出された。しかし、まだ、その是正は滲透していない。もちろん豊島与志雄に対しては、一部の人々から、幽玄な作風、近代的知性を持った真の自由人的風格を持った作家、孤独を愛する真の教養人的風格を持った作家、オールドリベラリスト的な分子をいささかも、戦後になっても見せなかった作家・批評家、こういう評価も一部では早くから行なわれていたのでした。しかしながら豊島与志雄研究は、まったくといってよいくらい進んでこなかったと思います。

紅野敏郎は、『豊島与志雄著作集』のパンフレットにおいて、平野謙が「「文学史上の光栄と孤立」という文章を書

いて」いることにふれ、「豊島与志雄の位置、それは、たしかに文学史上の「光栄と孤独」ということだったと思います」と述べている。

昭和五十（一九七五）年に出版された『現代文学史』（集英社）上下二巻の上巻において、小田切秀雄は「いま『豊島与志雄著作集』（未来社刊）の大冊六巻にまとめられている作品は、容易な断定を許さぬ複雑で多面的なものを示している」（二六六頁）と述べ、豊島与志雄の『恩人』について、「『恩人』のなかに、主人公の若い夫がひとりで星空の下を歩き、〝天体の悠久なる律動〟を感じ、さらに〝心霊の孤独と多元的宇宙の相互の愛とが、殆んど何等の矛盾なしに彼の心に感ぜられた〟、と書かれているところがある。人間の心理的関係の底に、漠然とながら存在論的な〝存在〟の感覚をすえようとしている部分だが、個々の具体的な心理から日常性をこえたこうした感覚にいたるまでの内面性のひろがりは、その後の作品でのじつにさまざまな技法上の試みをとおして、写実の深まりと同時に意識下や神秘にわたる多様な局面を次々と示し、それはやがて戦争下の孤独な内的抵抗から生まれた『白塔の歌』（昭和十六年四月、弘文社刊）所収の一連の〝近代伝説〟、また、敗戦直後からの『沼のほとり』（昭和二十一年四月）等一連の〝近代説話〟（いずれも作者自身がそういう名をつけている）の諸短篇として熟してゆく。これらは、その時代なりの人間をとりあげてあざやかに現実的・写実的に物語を進めながら、それらがいつのまにか超現実のような、メルヘンないし説話めいた輪廓の中に移されてしまうまったく独自なもので、酷薄な現実によって苦しむ人々を温くとらえ表現することに向かって精神が自由にはたらいている形を示している」（二六七～二六八頁）と述べている。

また、関口（一九七九）は「豊島与志雄は近代日本の作家中、つかみ難い、不思議な存在である。彼は大正三（一九一四）年五月、雑誌『帝国文学』に載せた「彼と彼の叔父（恩人）」が自然主義系の評論家中村星湖に認められ、いち早く世に出たのであった。が、順調な出発をした割には、その作品は人々に迎えされること少なく、一度も流行の